

エッセイ — 【特集】 COVID-19 と「移動する子ども」

親として，教師として，子どものことばの学びを どのように支えることができるのか

COVID-19 の影響下で変容する日常実践の現場から

中野 千野*

© 2020. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. COVID-19 の影響と子どもの学びを巡る混乱

「ああ，来たかあ」，ため息とともに思わず出たことば。息子の学校からのメールだった。親たちの間では既に噂になっていたが，まさかこうも急に現実になるとは思わなかった。メールには翌週から学校を閉鎖すること，すべての授業は「Google classroom」（以下，Google classroom とする）とビデオ・Web 会議のアプリケーションである「Zoom」（以下，Zoom とする）を使つてのフルオンラインの授業に移行すること，パソコンなどのデバイスが必要な場合は，学校に取りに来るようといったことが書かれていた。

2020年3月下旬，わたしの住むシドニーでは，新型コロナウイルス感染症（Coronavirus disease 2019，以下 Covid-19 とする）拡大防止の措置として，州境，国境を閉鎖，ロックダウンへと突入していった。その数か月前に突然のように現れた Covid-19 は，瞬く間に世界中へと広がり，わたしたちがこれまであたりまえのように営んできた日常は急速に姿を変えていった。オーストラリアに息子と二人で移住してきて3年，ようやくこちらの生活にも慣れてきた矢先，こんなことになろうとはだれが予想できただろうか。言いようのない不安がわたしの中

* ノースショア日本語学校教員 (E メール：okamotonakano0320@gmail.com)

で広がっていった。

他方、土曜校¹も、教育省からの通達で、否応なくオンライン授業へと突入した。突入した時、土曜校（以下、勤務校とする）は年度末で、あと二・三回で「秋休み」に入るという時期だった。わたしは当時小学部一年生の担任をしていたが、あまりにも突然で、勤務校としても全く準備ができていなかったため休校も検討されていたが、子ども²たちの学びを止めたくないという校長先生と役員さんの強い気持ちもあり続投となった。とはいえ、その対応は、メールでその日の課題を保護者にスキャンして送り、やり方を指示、できたらメールで送り返してもらうといったもので、いわば通信教育のようなものだった。

月曜日の朝、息子の学校（現地校）からの指示に従い、パソコンを開き、Google classroom をダウンロードし、使い方もよくわからないまま、なんとか息子のクラスに辿り着いた。Zoom はそれまでにも使ったことがあったが、Google classroom は初めてだった。「ストリーム」³には、時間割とともに今日やることがずらりと並んでいた。「授業」の項目に飛ぶと、さらに詳しく英語と算数の課題が所狭しと並んでいた。オンライン授業への移行のレターが届いたのが金曜日で、週末を挟んでの初日だったため、先生たちもオンライン授業の準備に大変なはずで、初日は緩い展開になるだろうと高を括っていた。ところが、課題を見て面食らってしまった。誰もがこれまで経験したことがないこの非常事態だということに、息子の学校はこれまでの対面授業と同じようにオンラインで進めようとしていたからである。しかもこれまでの復習ではない。新しい学習項目が容赦なく入っているのだ。その課題の多さに加え、時間割通りに進め、課題を提出という指示にも驚いた。自宅なのに時間割通りにできるわけがないだろうと怒りや不安など複雑な感情がせめぎ合う中、しかたなく息子の課題をプリントアウトしていると、携帯電話のアプリの着信音が次々と鳴った。わたしはこれを「裏アプリ」と呼んでいる。学校の公式アプリではなく、各学年の保護者たちが任意で共有する携帯電話用の連絡アプリ（以下、アプリとする）だからだ。任意なので長らくわたしも参加してはいなかったのだが、仕事で日本に住む夫が発足当初からこのアプリに参加しており、「メリットが大きいからあなたも入ったほうがいい」と進められ、しかたなく入ったアプリだった。しかし、夫がいうようにそのメリットは大きく、幾度となくこのアプリに助けられた。学校行事のリマインドから宿題、体操服や

1 日本語補習授業校の別称。土曜日に開催されることが多いことから別称で呼ばれることが多い。筆者は「補習」ということばに抵抗があるため、あえて土曜校と表記した。

2 複数言語環境で成長する子どもを指す。

3 Google classroom の中にある項目名称。

水筒などの紛失物に至るまであらゆる情報を共有してくれるからである。とりわけ、わたしは移住して3年で、オーストラリアの学校文脈がまだまだよくわかっていない上に、自分の母語ではないことばで多くの情報を理解し、すべてを一人で対応していかなければならない身としては、ありがたい存在だった。

話を戻すと、次々と入ってくるメッセージを開くと、「Google classroom に入れない」という類から、課題の量に至るまで、それはもう様々だった。現地の親たちでさえ、混乱しているようすがよくわかる。「よかった。わたしだけじゃないんだ」という安心感が芽生えた。オーストラリアの学校では、クラスの担任によって課題の内容や量が異なるため、それぞれの親の置かれた立場によって反応は様々だった。家で自身の子どもの勉強に付き添ってられる親は「この課題ならすぐ終わるから、もっと増やすように担任と交渉しよう」と主張し、その主張に呼応するかのように、別の親がネットからタスクを見つけてアプリで共有していた。他方、夫婦ともに自宅でテレワークしている親たちからは、「オンライン授業に張り付いたら仕事ができない」とパニック状態のメッセージがあれば、「子どもが3人いてそれぞれ別の学校に通っているから手が回らない」、「下の子どもにかかりきりで、上の子どもはほったらかしになっている」といった悲鳴もあがっていた。

2. 置いていかれる息子

2.1. 親たちの混乱の背景

政府による通達で、小学校から大学に至るまでフルオンライン授業へと移行したものの、どのように進めるかは各学校、各学年によってもまちまちだった。息子の学年の親たちが混乱した背景には、オーストラリアの新学期と息子の学年が大きく関係していた。

息子は現在小学三年生になるが、オーストラリアの多くの小学校では、インターネットなど情報通信技術 (Information and Communication Technology 以下, ICT とする) を使った教育が本格的に始まるのは小学校三・四年生からである。まさにこれからというときにオンライン授業へと突入、しかもオーストラリアは新学期というタイミングだった。新しいキャンパス、新しい学年、新しい担任、新しいクラスメートという何もかもが慣れない環境下でのスタートだったのだ。三年生の子どもたちは、教科内容がそれまでの具体的で体験学習的な授業から抽象的な概念を含む、よりアカデミックな色合いの強い学習事項が容赦なく入ってくる中でのオンラ

イン授業への移行ということもあり、親も家庭で「教師」の役割を担わざるを得なかったことは否めない。担任教師や学校事務局からは、ICTのリテラシー教育も含め、使い方の動画やマニュアルが次々と送られては来るものの、子どもたちはまだ習っていないため、結局は親がパソコン、場合によってはiPadの使い方からダウンロードの仕方、Google slideの使い方、写真の撮り方、課題のアップロードにいたるまで、一つひとつ子どもと一緒にやりながら教えるという作業が必要だったからである。もちろん息子の学校でも、キンダーガーデン⁴からiPadで簡単なタスクを遂行するという授業はあったが、自分で課題をプリントアウトしたり、打ち込んだり、アップロードしたりというものはなかった。それに加え、親たちには教科内容の理解を助け、その課題を遂行するという支援まで担わざるを得なかったのである。

年齢や子どもにもよるだろうが、我が家の場合は、8歳の息子が一人でパソコンの前に座り、一日に数コマ、各20分程度のZoomの授業で内容を理解し、送られてきた動画を見て課題を遂行、その日のうちに提出するという流れには全く至らなかった。ましてや息子は、英語で課題をこなすことにも限界があるため、結局、わたしが四六時中、横について一つひとつ支援しなければならなかった。

2. 2. 息子の困りごと

息子は、オーストラリアに来て3年になるが、週に2回はEAL⁵の授業を受けている。加えて、彼はソーシャルスキル面においていくつか課題を抱えている。その課題とは、一つ目は、言語にかかわらず、向き合う相手によって慣れるまでに時間がかかるというものである。とりわけ親しい人以外と話すことが苦手で、彼にとってはかなりハードルが高いようだ。そのような状況なので、たとえ日本から駐在で来ている近所の人に声をかけられても、なかなかことばを返すことができない。日本語であろうと英語であろうと、買い物にいても自分の気持ちを相手に伝えたり、お願いしたりといったことが難しいのである。買わずに戻ってしまうことも度々あった。二つ目は、一度に複数のことを頼まれたり、指示されたり、それがうまくできなかったりするとパニックになり、泣いて寡黙になってしまうことがある。そうなるとなかなか

4 通称「キンディー」と呼ばれる就学前準備教育の期間を指す。ニューサウスウェールズ州では、義務教育が4歳または5歳から始まり、この「キンディー」という準備教育の期間を経て小学校一年生へと移行する。

5 English as an Additional Languageの略。英語を母語としない人が今が持っている言語に追加するという意味で、追加言語としての英語を指す。

気分を変えられないようで、相手がその対応に困ってしまうというものである。そこで、今年から学校のスクールカウンセラーについてもらい、ソーシャルスキルに関してのサポート授業を週に一回受けることになっていたのだが、オンライン授業となってしまったためそのサポートは保留となってしまった。

他方オンライン授業はというと、息子の場合は Zoom での授業参加が新たな課題となった。息子は Zoom が苦手である。授業がオンライン授業に切り替わり、最初の一週目こそ Zoom での授業はなかったが、二週目からは全体集会から授業、昼休み、放課後のプレイタイムに至るまで時間割通りに行われていく中で、それらの一部が Zoom セッションとなった。Google classroom で出席が取られ、午前中に 20 分から 30 分くらい Zoom での授業が二回ほどあった。新しいクラスになって日が浅いせいか、Zoom の画面からも子ども同士のよそよそしさが感じられた。そのため、昼休みやアフタースクールには Zoom での交流時間が積極的に設けられた。しかし、息子はそういった任意の交流には「絶対出ない」といって参加しなかった。Zoom の授業では、息子は発言を求められるのが嫌なのか、目を離すとカメラをオフにしたり、ギャラリービューにしたり、スピーカービューにしたりと、画面を触って遊んでしまうことが度々あった。息子のみならず、子どもたちの中には、集まりの時間を忘れているのか現れない子どもがいたりした。最初の頃は、ぬいぐるみやおもちゃの見せ合いになったり、画面から突然消えてしまう子どももいたりした。わたしは息子に何とか Zoom に参加してもらいたいと思い、いろいろと言って聞かせてはみたものの、結局うまく参加することはできなかった。

わたしも、そのような息子の気持ちがわからないわけでもない。オンライン授業の期間中に、クラスの連絡員であるお母さんを中心として、Zoom でのモーニングティーが開催された。その目的は、子どものオンライン授業をサポートする上での苦労や問題点を共有し、精神面、物理的な面で助け合ったり、学び合ったりする機会として設けられていた。とてもありがたい機会ではあったが、わたしも気が重かった。この Zoom を使ったコミュニケーション手段は、英語がまだ今ほどわからなかったときに、電話でコミュニケーションする感覚に似ていると感じる。つまり、人はコミュニケーションする際に、そこにある物だとか、匂い、触った感覚や肌から伝わる温もり、感情など五感を使ってコミュニケーションしようとする。その五感に頼る度合いは人によって強弱はあっても、とりわけ苦手な言語でコミュニケーションする場合は、その五感をフル回転させてコミュニケーションをとろうとするだろう。わたしの場合でいえば、ただでさえ、英語で話されることを理解しようと必死なのに、Zoom では、リアルな対面でのコミュ

ニケーションと違って、その五感にフルに頼ることができず、目と耳だけが頼りである。目といても、一对一の会話ならまだしも、初めて会う人が大勢いる中で次々と交わされる会話では、どこを向いて話しているのかわからない人もある。その場合、今度はほとんど耳だけでその場の会話の内容を理解し、ターンをとって、コミュニケーションを構築していかなければならないのだ。正直、わたしも苦手である。兎にも角にも、なんとか私たち親子の困りごとの現状を訴えた。すると、お母さん方は課題や宿題でわからないことがあれば、アプリで共有してくれたら、いつでも助けるからと温かい言葉をかけてくれた。しかしながら、わたしたち親子の困りごとは、すぐに解決できるような困りごとではない。そもそも課題によっては、どこがわからないかもわからず、どこで躓いているのかもわからず、どこからどう聞けばいいのもわからないことが多々ある。それを英語で説明し、その回答を得るのにやり取りしては、さらに時間が経ち、提出時間に追われるという羽目になる。その一連のやり取りだけでも親子で心身ともに疲れ果ててしまうだろう。結局息子はぐずり、そんな息子を叱咤激励しながら、自分の授業の準備もしなければならぬ流れになることは、これまでの経験から目に見えていた。今こうやって振り返っても思い出せないほど、あの当時は毎日ストレスを抱え、正直、わたしはいつ倒れてもおかしくない状況にあった。あまりの大変さに、息子連れ、日本に一時帰国しようと出国申請を試みたが、オーストラリアでは出入国に関して厳しい禁止措置がとられているため、出国許可が下りなかった。「多文化共生」という名のもとに、「支援が必要な人は声を出せ」と言われても、そのエネルギーさえもなく、どこにどう出せばいいのか、そのことを考える余裕もないほどあの時は疲れ果てていた。COVID-19の影響下で、外国につながりを持つわたしたち親子のような状況に立たされている人は、オーストラリアのみならず、世界中のいたるところに今なお五万といるだろう。

2. 3. 見えない困りごとから孤立へ

息子が抱えているソーシャルスキル面の課題は、学校側とも共有していた。しかし、いざオンライン授業となると、息子が授業に参加できている、できていないには関係なく進んでいった。わたしも教員という立場にあるので、その立場からすれば、息子に発言を求めて心的負担をかけたくないということと、ただでさえ限られた時間の中で、Zoomで授業を行い、その日の学習項目を入れていかなければならない中で、一人ひとりに時間をかけてはもらえず、先に進まざるを得ない状況であることは想像に難くない。息子は、学校での対面授業なら、友達に

聞いたり、机間巡視する教師に助けを求めたりすることもできるのだろうが、Zoomではそれがなかなか難しい。息子は声をかけるタイミングもわからず、それ以前に英語で学習内容を理解することに精一杯で、内容もよくわかっていないことが多い。その状況で課題に向き合わなければならないため、Zoomセッションが終ったとたんに、「わからない、できない、やりたくない」と泣き、パニックになるという悪循環となっていた。勿論、わたしも彼の課題と一緒に取り組み、教えながらの課題遂行となるのだが、わたし自身もオンラインで授業があるので、息子の授業を連続して受けているわけにもいかず、内容もよくわかっていない。そこに加えて、算数や音楽などは、わたしが日本で習った方法とは異なり、サポートするとなると、まずはわたしがその方法を勉強しなければならない。とりわけ宗教学に至っては、わたしもその課題を読まなければ答えることができず、スペイン語など語学も然りだ。ということで、とても片手間にサポートできるレベルではなくなってきていることがわかってきた。これには息子以上にわたしが参ってしまった。わたしがサポートしなければ、息子は一人で課題に取り組むことが難しい。とはいえ、わたしが息子につきっきりでサポートしながら、仕事をこなしていくという生活を続けることは現実的ではない。わたしが体を壊してしまっただけで本末転倒だからである。このままでは、いつまでたってもわたしがサポートしなければ息子は課題を一人でできないことになり、なにより息子の学びにつながらない。それどころか、今は学ぶ楽しさとは裏腹にストレスばかりが溜まり、親子共倒れになるのは時間の問題だとさえ思えた。そんなことを考えているうちに、「そういえば、最近、息子はEALクラスには出席していないし、課題もきていない。どうなっているのだろう。ほかのEALクラスの子どもたちはどうしているのだろう」という思いが巡ってきた。

なんとかこの現状からの打破を目指し、わたしは早速、担任教師とEAL教師⁶に、わたしたち親子がどんなことに困っているのか、この先どのように息子の学びを支えていけばよいのかを相談するべく、メールで現状を訴えた。すると担任教師からは、今はだれもが経験したことがない非常事態であること、誰もが不安な状態であることへの理解と励ましのメールが来た。ところが驚くべきことに、息子の課題が毎回出されていたので、わたしたち親子がそこまで課題に苦勞しているとは知らず、気づかなかつたと書かれており、謝罪のことばが述べられていたのである。

6 EALについては2. 2. を参照のこと。英語を母語としない子どもに英語教育を行う教師で、在籍学級での学び、および学校生活をスムーズに行えるよう支援する役割も担う。

他方、EAL 教師は、わたしが指摘した現状はある程度想像できていたようだった。ローカルの親ですら課題のサポートが難しいと学校に訴えてきている状況で、EAL の子どもたちとその親の苦勞は計り知れないだろうと理解を示し、自身も支援のタイミングを見計らっていたということが書かれていた。彼女の見解としては、今はオンライン授業に移行したばかりで、保護者も子どもたちも慣れるのに必死であるため、これ以上課題を出すのは、さらに負担をかけることになり、その配慮から出していなかったこと、在籍学級での授業を優先させてほしかったことが書かれていた。これらのメールを見て、わたしは愕然とした。これまで一番身近で息子のことを見てきたであろう両教師の目には、息子の持っている「ことばの力」が見えていなかったのだ。担任教師は新しく変わったばかりなのでもかくとしても、わたしが課題をサポートしていたとはいえ、二年近く息子を担当してきた EAL 教師にも息子の持つ本当の「ことばの力」が捉えられていなかったことに、ショックでことばを失った。そして、わたしは息子の課題をどこまでサポートすればよいのかを悩むようになった。わたしは、そのメールへの返信で、一度 Zoom で相談の機会を設けてほしいとお願いし、このような時だからこそ、実は EAL の子どもたちこそ、支援を必要としていること、課題への負担に配慮するならば、ぜひ EAL のクラスを再開し、在籍学級の英語の課題の代わりに EAL の課題を提出することで、英語の課題の提出と見做すなどの配慮を提案した。というのは、子どもが少しの助けで、自分でできる範囲のことから始めなければ、たとえ課題を提出したとしても、息子の学びにはつながらず、わたしの課題になってしまっていること、また今回のように、「ことばの力」や学びの力が誤解されてしまっただけで、「だれのための、なんのための学びなのか」を不透明にし、「学ぶ」ことの根本的な意味が今まさに問われようとしているとして、検討をお願いした。

大学院時代には、オーストラリアの ESL⁷ 教育に刺激を受け、文献や実践から学ぶことも多かった。オーストラリアは、さまざまな国から移住してきた人が多く住み、社会言語学的な視点を持った土壤があり、多文化共生という点においても、日本よりも先行しているという印象が強かった。それがここオーストラリアにおいてさえ、COVID-19 の影響下では、わたしたち親子は不透明な存在となり、直面している課題も、かれらの目には見えていなかったのだ。大学院時代に議論してきた海外から移住してきた人々が「周辺化されていく」過程を、わたしはまさに身をもって体験したのである。と同時に、オーストラリアにおいて、これまで多くの研

7 English as a Second Language の略。英語を母語としない人の第二言語として英語を指す。

究者や実践者の間で議論されてきたESLの子どもたちの「ことば」の教育についての議論はなんだっただろうかという何とも言えない複雑な気持ちに駆られた。COVID-19の影響下では、長年、複数言語環境で生きる子どもの教育に携わってきたEAL教師でさえも、問題の核が見えなくなっていたのである。

3. 勤務校でのオンライン授業の試み

3. 1. 学校での対面授業からオンライン授業へ

勤務校では、わたしはこの新年度から七年生のマルチエイジクラス⁸(以下、クラスとする)の担任になった。このクラスは、わたしが担任をするのなら、今年こそはしっかりしたカリキュラムを作っていきたいという学校側の意向もあり、わたしがそのカリキュラム作りを担当することになっていた。以下は、保護者に配布した「七年生だより」からの一部抜粋である。

七年生くらいの年齢になってきますと、これまで以上に抽象的な深い思考ができるようになっていきます。そのため日本語を通した学習が実生活とどのように結びついていくのかをそれぞれが自身の生活やこれからの生き方といった自身の〈生:Life〉を探求していく中で、〈自身の学び〉として位置づけられるように授業を共に創っていきたいと思っています。そのため、先生にすべて教えてもらうといった受け身の姿勢ではなく、自らが学びとっていきような時間にしてほしいと思います。

(「七年生クラスだより」より一部抜粋 2020年5月2日配布)

上記の記述からもわかるように、わたしは学校での対面授業であろうと、オンライン授業であろうと、「日本語を学ぶ」というよりも、生徒自身が日本語の学びを通して、日々の生活やこれからの人生に自身の持つ「ことば」や複数言語環境で生きる経験がどのようにつながっていき、それらをつなげていこうとしたりしているのかに少しずつ向き合っていくことが、これらの学びへの姿勢を育てていくのではないかと思い、このクラスをその活動の場にしていきたいと考えていた。その背景には、学校側から七年生が自分のキャリアについて少しずつ考え

8 今年度(2020年度)は12歳から15歳までの日本につながりを持つ生徒が在籍している。

ていけるよう、いろいろな職業について学ぶことを指導計画に入れてみてはどうかという一提案をもらったからでもあるが、12才から15才という発達過程においては「抽象的な深い思考」ができ、自身の生を探求していく中で「自身の学び」として「ことば」を「共に創ってい」けるような授業を目指していきたいというわたしの教師としての思いもあったからである。そこでカリキュラム作成にあたり、一年を通して自分と向き合うきっかけとしての授業になるようなカリキュラム作りを目指した。一年を通した大きなテーマは、「自分について知る」ということを掲げ、一学期の目標は「自分を話そう、友だちを知ろう」であった。その目標を遂行する一環として、生徒自身が興味・関心のある、または将来なりたい職業について調べ、各自、動画を作り、発表をするという実践活動をすることにした。本来であれば、既述の活動と並行して、生徒と同じように複数言語環境で生き、様々な職業に就いている先輩をゲストとして教室に招き、座談会形式で話し合う「ビジターセッション」を展開しようと企画していた。ところがCOVID-19の影響で叶わず、二学期以降に変更となった。

さて、オンライン授業をどう展開するかという本題であるが、わたしのクラスでは、基本は2回のZoomセッションとGoogle classroomを中心に、パワーポイント（またはGoogle slide）、iPadなどを使って授業を行うことにした。勤務校からは、3時間の授業のうち、40分のZoomセッションを行ってほしいこと、できればGoogle classroomを使ってほしいというリクエストはあったが、一番大きかったのは、息子の現地校のオンライン授業への参加をサポートした経験だった。親子で苦労したあの経験である。現地校の先生方のICTリテラシー面も含め、どのようにオンライン授業を遂行しているのかがとても参考になったからである。勤務校からわたしたち教員へのサポートとしては、Zoomに詳しい保護者が教員向けにZoom研修をしたり、NSWの教育省が展開するコミュニティランゲージスクールの教員向けのZoom研修への参加の呼びかけがあったりした。それらに加えて、わたしが準備したことは、大学院時代の先輩が展開するオンライン授業関係のワークショップに参加したり、YouTubeにあるGoogle classroomの使い方などの動画を見たりしてスキルや方法を学んでいった。準備に充てる期間は一週間程であったため、授業をしながら学び、学びながら授業をしていくという試行錯誤の連続だった。

授業では、1時間目と3時間目にZoomセッションを行い、2時間目は、各自の課題作業の時間とした。授業を1時間目と3時間目に分けたのは、1時間目に授業の導入を行い、3時間目に、生徒が2時間目に作業し、Google classroomにあげた課題についてのディスカッションをし、各自の学びへとつなげていきたいという狙いがあったからである。それに加えて勤務校側の配慮

もあった。生徒の中にはきょうだいで参加している子どももあり、パソコンを共有する子どももいるからである。また教員の中には、わたしのように親もクラスを持つというダブルロールの「お母さん先生」もいる。とりわけ低学年の子どもたちは、まだパソコンや Zoom の使い方がわからないし、ましてや一人で Zoom 画面の前に座って課題をこなしていくには無理があり、親のサポートが必要だからである。そのため授業の時間帯が被らないように組まれていたのである。

3. 2. 新たな挑戦

わたしのクラスの生徒は、現地校で ICT 教育を受けており、既にオンライン授業にも移行していたため、ほとんどの生徒がパソコンの操作、Google slide、Google classroom の使い方には慣れていて、不慣れな生徒には、学期が始まる前に個別に対応し、できるだけスムーズにオンライン授業へと移行できるように努めた。

学期が始まってからは、授業の導入などは、わたしが作成した動画を事前に配信し、Zoom の授業では、課題についての具体的な説明をしたり、わからないところを共有したり、グループやみんなでディスカッションしたりする時間に充てた。というのは、無料の Zoom セッションは40分で切れてしまうため、限られた時間内で授業を展開させ、最大限有効に使う必要があったからである。とはいえ、わたし自身も ICT は苦手なもので、ましてや Zoom で授業など初めての経験であったため、Zoom でワークショップに出たり、YouTube で学んだり、まさに自転車操業の授業づくりだった。ところが、いざ Google classroom やホワイトボード機能などを使ってみると、課題の管理がしやすかったり共有しやすかったりで、想像以上に使い勝手が良かった。また授業で使う動画を作成することも、まるでユーザーにでもなった気分、わたし自身もとても楽しい経験となった。

一学期の目標であった「動画プレゼンテーション」という実践活動は、わたしの不安をよそに、生徒たちは次々に動画を作成し、Google classroom にあげてきた。学期初めの授業で、興味のある職業を一人一人に話してもらい、それに関する読み物や資料としての動画を私のほうでも毎回用意し、それをもとに日本語や英語での資料の集め方、調べ方を説明した。生徒たちは、その経験や知識を活かして自分の発表に必要な情報をサイトで見つけたり、資料を集めたりして、スクリプトとスライドを完成させていった。その作業と並行して、「人に伝わるプレゼンテーションとは何か」をみんなで考え、それをもとに「動画プレゼンテーション」の評価

基準を話し合い、「ピア・アセスメントシート」を作成した。また動画の作り方についても、それを説明するためにわたしが作成した動画を素材に批評してもらい、自身の動画づくりの参考にするように指示した。双方向の授業を目指したつもりだったが、ブレイクアウトセッション以外は、自ら進んで話す生徒は固定化しがちで、息子と同様、Zoom が苦手なのか、「～さんは、どうですか」とふらなければ、なかなか話そうとしない生徒もあり、ややもすると一方向の授業になりがちだった。

同じ学校にいたとはいえ、わたしはこれまで高学年の生徒と接する機会がほとんどなかったため、今回担任した生徒たちとは初対面であった。そういった中でのオンライン授業は、教師と生徒というだけでなく、生徒同士もまた、最初の数週間はよそよそしい雰囲気があった。新しいクラスメートと一つのクラスコミュニティとして関係性を相互構築するには、学校での対面授業より時間がかかったように思う。

4. 変容する日常実践と子どもの「ことばの学び」

ここまで、親として、教師としての両面から、複数言語環境で生きる子どもの「ことばの学び」を支えようとオンライン期間中の経験と試みを描いてきた。COVID-19の影響で、わたしの日常実践は確実に変容しつつある。

親の立場としては、息子の授業に参加して初めて見えてきたものが多くあった。息子は相変わらず Zoom 授業への参加は苦手で、わたしが横につく必要がある。しかし学校側の息子へのサポートは劇的に変わった。その後、担任教師、EAL 教師とそれぞれに息子のオンライン授業への参加の仕方を話し合った結果、息子はオンライン期間中であっても週に2回は Zoom で EAL の個人指導を受けることができるようになった。個人指導となったのは、EAL の生徒はそれぞれレベルが異なり、家庭の事情により実施できる時間帯が違ったからである。EAL の課題は、一人でできるレベルから始め、自信を育むことが目指された。さらに在籍学級での課題で支援が必要な場合には、EAL 教師が Zoom でその支援にあたることになった。在籍学級の課題は、締め切り日に関係なく取り組み、提出をする、または EAL の課題を提出することで在籍学級の課題を終了したと見做された。つまり課題の遂行過程を重視した配慮が施されるようになったのである。これによりわたしたち親子は、締め切りに追われることなく、じっくりと課題に向き合えるようになった。とはいえ、それらの配慮や支援はオンライン授業期間中の暫定

的な対応であり、息子が抱える問題が根本的に解決したわけではなかった。その一方で、学校側もわたしも急変した学校生活にあっても息子の「学び」を少しでも前に進めていきたいという思いは一致していた。だからこそわたしは困りごとを明らかにした。このことは、現地校の教師たちと、息子のみならず、EAL の子どもの学びについて改めて考える機会となったと考えている。

他方、教師としては、COVID-19の影響でオンライン授業を試みることとなり、生徒とその親、勤務校とともに試行錯誤のオンライン授業づくりではあったが、今振り返ると、この過程そのものが複数言語環境で生きる子どもの学びを分断させず、紡いでいく新たな実践となっていたことに気がついた。Zoom や Google classroom など文明の利器にも頼り「動画プレゼンテーション」という方法を用いて、大きな一歩を踏み出すことができた。オンライン授業は、時間や経費、空間的な側面を超えて、人をつなぎ、「ことばの学び」を結ぶ新しい形での実践展開の可能性を広げてくれたように思う。勤務校での経験は、これまで要望があっても、8歳の息子を残しては引き受けることができなかつたレッスンも、日時さえあれば Zoom で引き受けることができるようになった。さらには、物理的な側面から足が遠のいていた研究会やワークショップにも少しずつ参加できるようになった。これは、わたしにとっては大きな進歩である。

その一方で、このエッセイを書きながら、COVID-19の影響下で、息子の「ことばの力」が見えなかつたのは、わたしも同じだったことに気がついた。先日、息子は初めて「Principle Award」(校長賞)をもらってきた。どうやらオンライン期間中の息子の頑張りが認められたようだった。息子は、「この賞はね、小さな賞状を5枚以上集めないともらえないんだよ」と教えてくれた。息子は息子なりに学びを紡いでいたのである。今後は、もっと息子のできることにも目を向けよう。そして彼が複数言語環境で生きていること、そしてその中であっても、自分の気持ちを自分の「ことば」として伝えられるように支えていこうと思った。その一歩として、わたしはこのエッセイを書いた。混沌とした社会の状況にいるときほど、いろいろなものが見えなくなるからである。わたしや現地校の教師たちがそうであったように、子どもの今しか見えなくなっていた。今も大切だが、とりわけ EAL の子どもたちは複数言語環境という中で日々成長しているのだ。今のこの経験もかれらは刻々と未来へと紡いでいるということを見失ってはいけないのである。

現地校は、5月末から通常の対面授業へと戻った。未だ制限はあるものの、親子で少しずつ「日常」を取り戻しつつある。わたしたちがこれまであたりまえだと思ってきた日常実践は、こ

れから益々変容していこう。オンライン授業だからこそ、息子のように参加が難しいと感じる子どももいれば、逆に参加しやすい子どももいるだろう。COVID-19の影響下で、文明の利器に頼ったり、翻弄されたりしながら、急速に日常が変わっていく中、あえて複数言語環境で生きるわたしたちの「日常実践」を描いたのは、複数言語環境で生きるとはどういうことなのか、そこに生きる子どもたちをどのように支え、どんな「ことばの学び」をこれから創っていく必要があるのかを親としても教師としても、問いたかったからである。COVID-19の影響があろうとなかろうと見えてくるものとは何か。わたしたちが見落とし、見失いかけている原点がそこにはあるような気がしている。その原点に立ち返る時、「日常実践」はどんな様相を見せ、どんな「ことばの実践」へとつながっていくのだろうか。親として、教師として、今後の展開に期待せずにはられない。